

2026年度 慶應義塾大学 一般選抜  
法学部 小論文  
出題意図および解答

〈出題意図〉

自由と安全、あるいは監視社会は、高校において学習し、日常の報道等においても接しているテーマであろう。もっとも、本問は、「自由」と「安全」の関係について、自由な記述を求めるものではなく、①刑法犯の認知件数の減少と体感的な治安との間のズレ、②防犯カメラという手法、③「法学研究会」における討論への参加、という3つの条件を設定している。①を理解したうえで、②監視カメラについて、③において示された2つの主張とその論拠と向き合うことが求められる。

〈解答のポイント〉

解答に当たっては、どのような結論を採ってもよいが、出題に即した答案が求められる。

(1) したがって、本問の3つの条件から大きく外れた答案、例えば、防犯カメラを離れて自由と安全の関係を抽象的・一般的に論ずる答案や、「パノプティコン」または外国における監視カメラの紹介に終わる答案は、出題の趣旨に即しているとはいえない。

また、「法学研究会」において意見1と意見2を受けて自分の見解を述べるのが求められているのだから、単に「みんなで議論することが大事だ」というのも、求められた答えとはならない。

(2) 一方、犯罪の認知件数の推移と体感する治安のズレに着目し、また、問題文中の2つの「意見」を丁寧に読み解き、自己の見解を論拠とともに述べた答案は、相対的に高い評価となった。例えば、「萎縮」は、本問では2つの文脈で問題となっている。①意見1における、「治安について不安なままでは、学業にも経済活動にも萎縮が生じる。」。②意見2における、「監視社会であり、市民の行動に対して強い萎縮効果が生じる。…」。意見1と意見2は、萎縮の有無について対立するのではなく、萎縮が生じる原因と萎縮の影響について対立している。意見1と意見2は、対立的ではあるが、両極端な主張ではない。

これらを認識できているかどうか、さらに、意見1および意見2の主張および論拠に、いかなる視点を付け加えているかが重要となる。